

群 教 ゼ	G02 - 03
	平 15.216集

マルチメディア教材「東村 新たな発見」 の作成とその活用

特別研修員 萩原 幹晴 (吾妻郡東村立東中学校)

《研究の概要》

本研究では、中学社会科地理的分野「身近な地域」の学習において、生徒の学習活動を支援する Web 形式のマルチメディア教材「東村 新たな発見」を作成し、その活用方法を検討した。本教材は、生徒が興味・関心を持って地域学習に取り組めるように、また課題づくりの支援になるように、さまざまな地域素材の画像を、課題づくりのポイントを示しながらまとめたものである。本教材を活用した授業実践を行い、その有効性を検証した。
【キーワード：中社会 - 中 地理 地域学習 興味・関心 マルチメディア】

主題設定の理由

中学社会科地理的分野「身近な地域」は、第1学年で学習する。ここでは「身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる。」ことを目標としている。

「身近な地域」は、生徒が生活舞台にしている地域のことであり、学習対象を生徒が直接経験できるといった特質を有している。そのため、生徒にとっては興味・関心を持ちやすい単元である。しかし、前年度、単元全体の取り組みを生徒に自己評価させたとき、「意欲的な取り組みができた」と答えた生徒は半数以下であった。その理由は、これまでに地域学習を何度となく行う中で、また同じことを学習するのかという気持ちを導入の段階で生徒に持たせてしまったことにあった。生徒は、小学校3・4年社会「地域の人々」、小学校総合的な学習の時間「東村とその周辺地域の人々の生活」、中学校1年総合的な学習の時間「東村郷土学習」において、すでに地域的特色を学習している。そのため、導入の段階で、東村の地理的事象について新たな発見やこれまでと違った視点に気づかせ、東村を見直してみようという興味や関心を持たせない限り、単元の目標を十分に達成することは難しい。

そこで、地域に関するマルチメディア教材を作成し、その教材を導入の段階で活用することで、生徒の興味・関心を高めたいと考えた。画像・音声豊富なマルチメディア教材は、それだけで生徒をひき付ける力を持っている。地域素材が豊富であれば、地域に対して新たな発見が生まれ、自然に興味・関心は高まってくる。さらに、地域素材のいくつかを教師が加工し、大切な部分が隠れる工夫をすれば、校外調査を希望する生徒もでてくるであろう。また、事前調査によれば、これまでに、地理的事象の見方、考え方の基本となる「なぜ、ここなのか」という視点で学習を進めてきた生徒がほとんどいなかったことから、地域素材の解説に「なぜ、ここなのか」という言葉を例示しようと考えた。そうすることで、これまでと違う視点で課題を設定することができる考えたからである。なお、学習の流れを簡単に例示し、単元全体をとおして自主的な生徒の活動を促す目的で、「学習の進め方のページ」を作成することにした。

以上のような観点から、マルチメディア教材「東村 新たな発見」を作成・活用することは、中学社会科地理的分野「身近な地域」における生徒一人一人の自主的な学習を促すとともに、本単元の目標を達成していくうえで有効な手段であると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

中学社会科地理的分野「身近な地域」の学習において、生徒一人一人が自主的に学習活動を進めていくことができるようにするために、マルチメディア教材「東村 新たな発見」を作成・活用し、その有効性を明らかにする。

研究の見通し

より多くの地域素材（画像・音声）を収集し、適切に組み合わせるとともに、地理的事象をこれまでと違った視点からとらえることができる工夫をすれば、生徒が地域に興味・関心を持つことができるマルチメディア教材「東村 新たな発見」ができるであろう。さらに、本単元の導入の段階において、「東村 新たな発見」を活用することによって、生徒の自主的な学習活動が促され、本単元の目標に迫ることができるであろう。

研究の内容

1 「東村 新たな発見」の概要

(1) 教材作成の方針

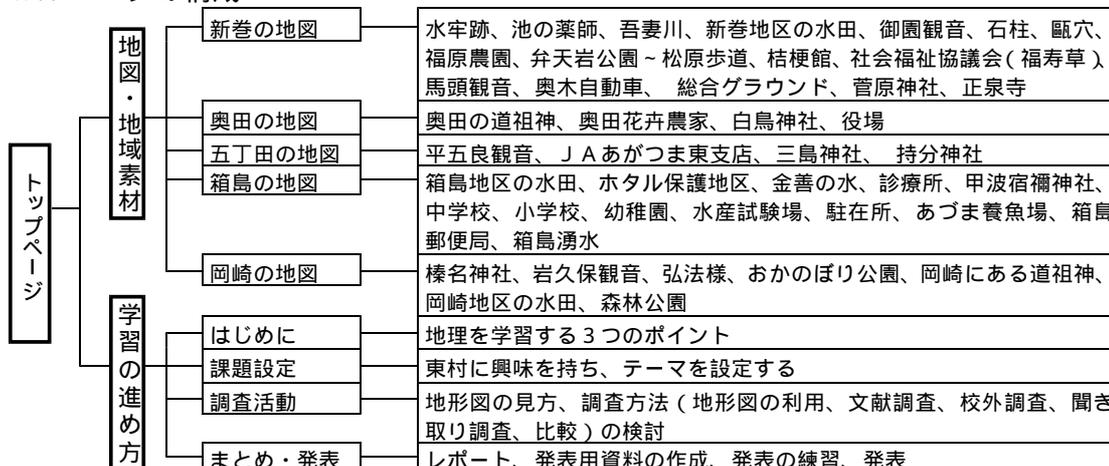
生徒の興味・関心を高め、中学社会科地理的分野「身近な地域」の学習における生徒の自主的な学習活動を促すことができるようにするために、以下の点に留意してマルチメディア教材を作成・活用していくことにする。

本教材は Web 形式で作成することにする。「操作が容易であり、情報を引き出しやすいこと」「教材としての保管もしやすく、現在の地域の様子を資料として保存したり地域の変化に対応した情報に更新したりしやすいこと」「情報活用能力の育成をはかるといふ観点からコンピュータに慣れ親しむ必要性があること」が Web 形式にした主な理由である。

本教材は、導入の段階で活用し、生徒の興味・関心を高めたり、課題設定の一助にしたりするものであると考え、教材作成にあたる。したがって、生徒の興味・関心や地域学習を進める上での課題意識を高めるために、地図・地域素材のページに多くの画像を採り入れるとともに、「なぜ、ここなのか」という多くの生徒がこれまでに学習していない視点を例示する。また、画像自体を加工して大切な部分が隠れている状態にし、自主的に見学に行こうとする意欲が高まるような工夫も取り入れる。

学習の進め方のページを作成し、課題設定以後の流れがつかめるようにする。

(2) Web ページの構成



2 「東村 新たな発見」の内容

(1) トップページ

起動すると、生徒にとって馴染みのある東村の写真がスライドショーで表示される。「click」ボタンを押すとトップページ(図1)に進み、「地図・地域素材のページ」「学習の進め方のページ」にジャンプできるようにした。また、ソフトの紹介や使い方の説明も付け加え、全体的なガイダンスのページとなるようにした。

(2) 地図・地域素材のページ

課題作りの支援となるように、地域素材の分布をあらわした地図のページと写真や動画、調べる視点を例示した地域素材のページを作成した。

ア 地図のページ

東村全体の地図である(図2)。「新巻」「奥田」「五丁田」「箱島」「岡崎」地区の名前をクリックすると、それぞれの地区の地図へジャンプする。それぞれの地図には、いくつかの場所に印があり、それをクリックすると、そこにある地域素材(建造物や自然のようすなど)のページへジャンプするようにした。地域素材の名前を掲載せずに印のみにする事によって、ジャンプしたページの画像を見て、「これは何か?」という疑問がすぐに生まれると考えたからである(図3)。地図はすべて、手書きで作成したものをスキャナで取り込み、生徒にとって親しみやすいものになるようにした。

イ 地域素材のページ

地図のページの印をクリックするとそれぞれの地域素材のページへジャンプする。課題設定の幅が広がるように地域の主な素材は網羅し、静止画や動画をより多く取り入れ、興味・関心が高まるようにした。また、教材は生徒が実際に調査する活動につなげるものであるため、素材の解説よりも調べる視点を例示し、課題作りのヒントになるようにした。



図1 トップページ



図2 東村全体の地図



図3 新巻の地図

図4は、平五良観音のページである。図4中の上の4枚の写真はサムネイル表示とし、画像をクリックすれば大きくなるようにした。また、一番左の杉の写真の下に「動画はこちら」から、「平五良観音の大杉」を下から見上げた動画にジャンプするようにし、その大きさを実感できるようにした。

図5は、岩久保観音のページである。このページにも動画を取り入れた。観音様のいる洞窟に歩いて近づいていくようすを動画にした。近づいて洞窟の全容が分かってしまいそうになるとモザイクがかかり、実際に行ってみないと分からないようにし、生徒の興味・関心を高めようと考えた。



図4 平五良観音のページ



図5 岩久保観音のページ

図6は、持分神社のページである。道路からお堂までは少し距離があるので、そのようすを図6中の上の3つの写真で説明している。鳥居からお堂までの道の途中、木が倒れていたりして他の神社とは違う様子を表現してみた。また、図6中の下の写真は、聖徳太子の像であるが、画像を加工し、実際に行ってみないとその像自体はどんなものなのか分からないようにした。

図7は東中学校のページである。解説には、「なんで東中はここなのか?」「いつできたのか?」などの調べる視点を例示し、課題づくりの手助けになるようにした。なお、「なぜ、ここなのか」という課題づくりの視点は、これまでの地域学習で生徒があまり考えなかった視点であったため、多くの地域素材のページに例示した。



図6 持分神社のページ



図7 東中学校のページ

(3) 学習の進め方のページ(図8)

生徒が自主的に活動していくことができるように学習の進め方を作成した。学習の流れに沿って「課題設定」から「調査活動(地形図による読図、文献調査、聞き取り調査、校外調査、比較による調査)」、「まとめ・発表」について解説している。

ア はじめにのページ

ここでは、地理の学習を進めていく上でのポイントを解説した。

イ 課題設定のページ(図9)

本教材の活用から、課題を設定していくまでの手だてを解説している。

ウ 調査活動のページ(図10)

このページから具体的に「地形図による読図」「文献調査」「聞き取り調査」「校外調査」「比較による調査」のページへジャンプするようにした。課題を解決するためにどの方法が有効か考えることができるようにしたいと考えた。

エ まとめ・発表のページ(図11)

まとめ方、発表の仕方について解説した。まとめ方としては、課題設定の理由、活動の経過と内容、調査の内容、結果と分析、感想という流れを例示した。また、発表方法としては、具体的にどんな言葉を使ったらよいのかを例示することで、自主的に発表の練習ができるようにした。



図8 学習の進め方のページ

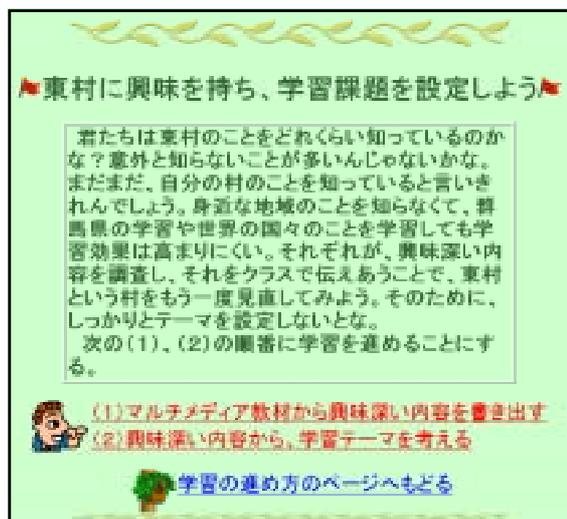


図9 課題設定のページ

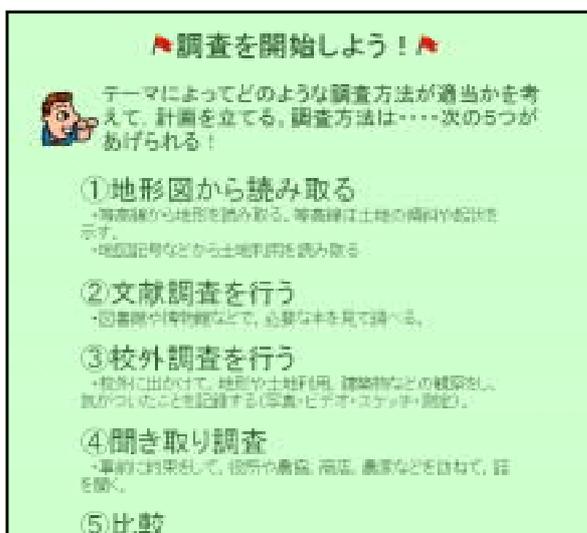


図10 調査活動に関するページ

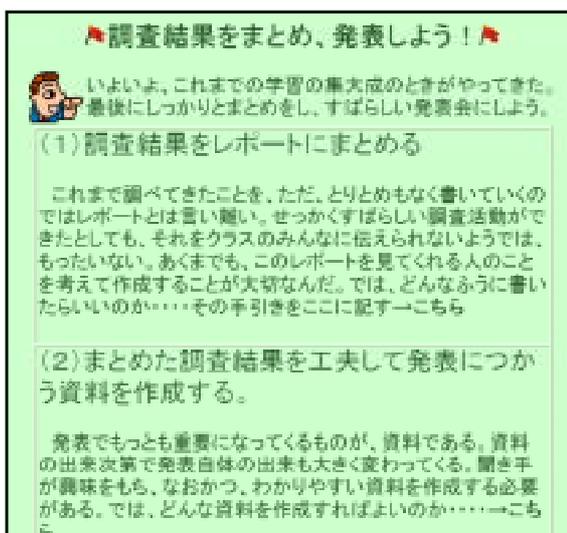


図11 まとめ・発表のページ

3 実践の結果と考察

(1) 学習指導計画

- ア 対象 吾妻郡東村立東中学校 第1学年
 イ 教科等 中学社会科地理的分野 単元名「身近な地域」
 ウ 学習のねらい

東村における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、東村に対する理解と関心を深めていくとともに、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けることができるようにする。

エ 指導計画

時	主な学習活動	学習への指導と支援	検証の観点及び方法
「東村 新たな発見」を見て、東村に対する興味・関心を持つ			
1 2	東村が全国に誇れるものを話し合い、東村に対するイメージを豊かにする。 「東村 新たな発見」を活用し、「東村」に対する理解を整理するとともに「東村」に対する興味・関心を高める。	「東村 新たな発見」を見て、自分たちの身近な地域に関するさまざまな事象に気づくことができるようにする。 「東村 新たな発見」のなかの多くの画像を見たり、モザイクのかかった画像を見たりして、「東村」に対する理解を整理するとともに、今後の調査活動に対する興味・関心が高められるようにする。 初めて知ったこと、興味のあることについて書き出しておき、課題設定に役立てることができるようにする。 生徒の様子を観察し、教材の使い方を支援する。	【観点】教材活用によって、東村に対する興味・関心が高まっているか。 【方法】教材活用時の教師による観察。生徒の自己評価(ワークシート)。
興味・関心に応じて、学習班を編成し、学習課題と学習計画を立てる			
3	前時の学習をもとに、興味・関心に応じて班を編成し、課題を設定する。 仮説を立てる。	前時までの学習によって広がった興味・関心をもとに班を編成することができるようにする。 地域的特色を追究することにつながるように、「なぜここにあるのか」という視点から課題をつくることを意識できるようにする。 課題を吟味し、仮説を立てさせることで、次時からの調査活動に意欲的に参加できるようにする。	【観点】課題設定に本教材が役立っているか。 【方法】課題設定時の教師による観察。 【観点】自主的に課題設定・学習計画作成を行っているか。
4 5	班で調査計画を作成する。 文献調査、聞き取り調査、校外調査等の計画を立て、次時からの学習の方向性を出す。	課題を解決していくために、文献調査、聞き取り調査、校外調査などの方法を選択し、班ごとに追究の計画が立てられるようにする。 調査において、対外的に連絡をとっておいいた方がよい班に対しては、教師が事前に連絡をし許可を得ておく。その際、質問内容や調査内容も連絡しておく。	【方法】教師による観察。 生徒の自己評価(ワークシート)。
学習班ごとに、調査追究を行い、レポートにまとめる			
6 7 9	地形図の見方を学習する。 休日や放課後を利用して、本で調べたり、地域の方に話を聞いたり、地理的事象のある場所に実際に行ったりして調査を行う。 調査してきたことを、レポートにまとめる。 発表の練習を行う。	地形図の見方(地図記号、縮尺、方位、等高線)を学習し、調査活動に生かすことができるようにする。 調査日時、調査場所を把握しておき、調査時のポイントを指導しておく。 調査するにあたって、マナー、安全面等の指導をしておく。 レポート作成にあたって、グラフや地図、写真の活用を促し、聞き手を意識したわかりやすいレポートになる工夫を意識させる。 発表の仕方を学習させ、相手を意識したわかりやすい発表ができるようにする。	【観点】課題追究・レポート作成に自主的に取り組んでいたか。 【方法】調査活動時の教師による観察と生徒の調査記録(ワークシート)。 レポート作成時の教師による観察。生徒の自己評価(ワークシート)。
レポートにまとめたものの発表し合い、東村に対する理解を深める			
10 12	調査内容を発表する。	東村に対する理解が深まるようにする。 レポートや発表の仕方でのよいところを認め、今後の学習につながるようにする。	【観点】東村に対する理解が深まるとともに、興味・関心が高まったか。 【方法】教師による観察。 生徒の自己評価(ワークシート)。

(2) 実践の結果と考察

実践を上記の学習指導計画のように想定した。まず、「東村 新たな発見」を活用し、学習に対する興味・関心が高まるようにする。それを受けて、課題設定、調査活動、発表会という流れで学習を進めていった。その過程で、生徒の取り組みを評価し、「東村 新たな発見」の

有効性を明らかにしたいと考えた。学習指導計画に沿って、4つの段階での検証を行った。

ア 「東村 新たな発見」を見て、東村に対する興味・関心を持つ段階

この段階では、まず、東村のイメージを発表させ、東村に対する既得知識を確認させた。これまでの地域学習で学習してきたものが発表された。次に、「東村 新たな発見」をパソコンにセットさせ、気が付いたことや興味のあること、疑問に感じたことなどをメモさせながら視聴させた。

教師の観察によれば、オープニングのスライドショーが流れた時点で、生徒は「おおっ」という歓声をあげ、教材に対する興味を持っていた(図12)。机間支援をすると、解説の文章をじっと見ている生徒や最後にモザイクがかかってしまう動画を何度も繰り返して見ている生徒、ねじれてしまって実際の石像がどうなっているか分からない画像をじっと見つめている生徒、実にさまざまであった。「そういえば、なぜ、この場所に中学校ができたんですかね。自分の家の近くならいろいろと便利なのに。」「なぜ、役場はこの地区なんですか。」といったつぶやきを見せる生徒もいた。すべての生徒がパソコンの画面に集中していた。改めて画像や音声などを用いたマルチメディア教材の力を感じた。しかし、一方で「画像が小さいところがあって見えにくいです。」というつぶやきもあった。



図12 教材を活用しているようす

生徒の自己評価によれば、22人中19人の生徒が「今後の調査活動に対して、興味が持てた」と答えた(残り3人のうち、2人は「まあまあ持てた」、1人は欠席であった)。教材の内容に関しては、22人中21人が「半分くらいしか知らなかった」と回答していた。知らないことが多いことを実感した生徒は、改めて東村に対する興味・関心を高めていった。

イ 興味・関心に応じて、学習班を編制し、学習課題と学習計画を立てる段階

この段階では、まず、「東村 新たな発見」から個人的に興味があることについて書かせ、それをもとに班編制を行った。次に、学習課題を吟味、設定し、学習計画を立てさせた。

学習課題は、「幼稚園や小学校、中学校がなぜ、この地区にあるのか」「役場はなぜ、この場所に移転したのか」「岩久保観音がなぜここにつくられたのか」「水牢はなぜこの場所につくられたのか」「お寺や神社がなぜ、この地域に集中しているのか」であった。

地理的事象の捉え方としてポイントになるのは、「他の場所でなく、なぜその場所なのか」ということである。地理的事象には、そこにあるべくしてある必然性が存在する。したがって、それを自然的条件や社会的条件、他地域のとの結びつき、人々の生活という観点から追究していけば、地理的事象の存在理由や、その地域の特色も見えてくる。しかし、生徒はこれまでに、「なぜ、ここなのか」という学習課題で地域学習を進めてきたことがなかった。そのため、あえて「東村 新たな発見」のなかの地域素材の画像解説に「他の場所ではなく、なぜここなのか」という視点を随所に入れ、普段何気なく見てきた地理的事象を見つめ直す機会を与えた。結果として、このことが、考え方の方向性を示し、上記の課題設定につながったと考える。生徒にとって、中学校や役場については、身近すぎて目を向けにくい地理的事象である。しかし、それらも捉え方次第で、興味深い学習課題になる。生徒自身、このことに気づいたことが、その後の自主的な学習活動へとつながっていった。

学習計画作成では、文献調査、校外調査、聞き取り調査のいずれかを行うように指示した。計画をしている段階で、「休みの日に見に行ってもいいですか。」「東村のなかに、このことに

ついて知っている人はいますか。」という質問がでたり、「デジタルカメラを借りたい。」という申し出もあつたりした。導入で高められた興味・関心が、課題設定と学習計画作成に自主的に取り組む姿勢を作り出したと考える。

また、生徒の自己評価によれば、すべての生徒が自主的な話し合いや活動ができたと評価した。これからの調査活動に対する意欲も全員が「高まっている」と回答した。授業の感想では、「疑問を考えて、予想したりしているうちに興味がわいてきた。」「なぜ学校がかたまっているのか知りたいです。」と書いてきた。生徒の興味・関心がさらに高まっていることがわかった。

ウ 学習班ごとに、調査追行を行い、レポートにまとめる段階

この段階では、放課後や休日を利用して、調査を行わせ、調査後、レポートにまとめさせた。

調査活動については、各班ごとに前段階で作成した学習計画に沿って進めていった。なかで

も「幼稚園や小学校、中学校がなぜ、この地区にあるのか」を課題とした班は、昼休みに文献調査をした後、教育施設が1つの地区に集中している理由だけでなく、その他のわからないことや疑問に思うことなどを、放課後を利用して、教育長さんに質問してきた(図13)。調査終了後、この班の一人が「いいレポートができそうです」と感想を述べた。充実した学習活動ができていることを生徒自身も実感し、次の学習に対する意欲を高めていた。また、「岩久保観音が



図13 教育長さんへのインタビューの様子

なぜここに作られたのか」を課題とした班は、日曜日に東村の文化財調査委員長さんを訪問し、疑問のほとんどを解決してきた。委員長さんも生徒の自主的な取り組みに大変感心していた。この班は、その後、実際に岩久保観音に行き、聞き取り調査によって得られた内容を確認する活動も行った。なお、その他の班も休日や放課後を利用して、校外調査や聞き取り調査、図書室での文献調査を自主的に行った。このように、生徒は、さまざまな調査活動の中から、最も課題解決に結びつきやすい調査活動を取捨選択し、自主的に課題解決に向けて活動した。

また、レポート作成については、すべての班がデジタルカメラで撮った画像を活用したり、地図で場所を示したりした。地理的なまとめかたの基礎を身につけることができた。特に、「幼稚園や小学校、中学校がなぜ、この地区にあるのか」を課題にしていた班は、棒グラフを作成し、聞き手にわかりやすいレポート作成を心がけていた(図14)。

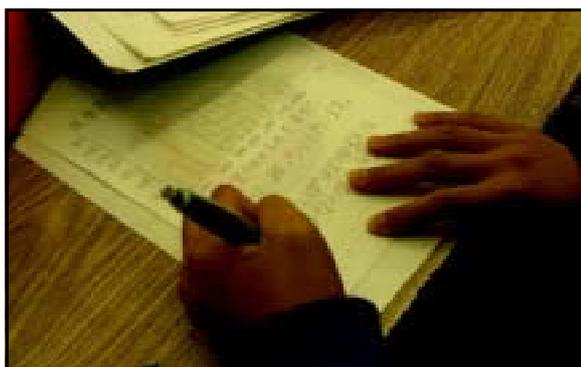


図14 調査結果を棒グラフで表す班

この段階での生徒の自己評価は、すべての生徒が「調査活動に自主的に取り組めた」であった。「この調査を行うことで、新しい東村がわかりました。東村に住んでいてもまだまだ知らないことがたくさんあり、また1つ興味を持つことができました。とても勉強になりました。」「教育長さんと話をするときとても緊張しました。学校のことがわかってよかったです。」という感想が見られた。興味・関心の高まりが生徒の自主的な取り組みを生み出し、充実した調査活動に結びついたと考える。

学校のこと

以上のことから、調査活動・レポート作成の段階でも、導入・課題設定・学習計画作成の流れを受けて、全体として自主的な調査活動を行うことができたことがわかる。導入の段階で興

味・関心を持たせることができたことが、こうした学習活動の流れを生んでいることを再確認できた。

エ レポートを発表し合い、東村に対する理解を深める段階

この段階では、各班がそれぞれのレポートを発表し、それをもとに東村に対する理解を深める活動を行った。発表までに、発表の基本的な流れを学習し、練習を重ね、発表会に臨ませた。発表会では、質問も多く、発表者と聞き手のやりとりも活発だった(図15)。



図15 発表会で質問する生徒

自己評価によれば、東村に対する理解が深まった生徒は22人中20人であった(残り2人はまあまあ深まったと答えた)。「分からなかったことがすごくよくわかり、分かっていたことにも改めて新しい発見があって、興味が持てた。」「質問が多くて、疑問に思ったことも解決されて、さらに理解が深まった。」「東村について知らなかった謎・秘密がこの発表で分かった。」という感想があった。

さまざまな班の発表をとおして、生徒は東村に対する理解を深めるとともに、東村に対する興味・関心を高めることができたと考える。

以上のように、「東村 新たな発見」の有効性を、授業実践の結果をとおして考察してきた。多くの地域素材を収集・提示するとともに、「なぜ、ここなのか」というこれまでと違う地理的事象を捉える視点を盛り込んだ「東村 新たな発見」は、生徒の興味・関心を大いに高めた。そして、それが課題設定、調査活動、発表・まとめの段階の学習における自主的な学習活動を促した。興味・関心の高まりによる学習意欲の持続が、生徒の東村に対する理解を深めるとともに、東村に対する興味・関心をさらに高め、本単元の目標に迫る学習活動につながったと考える。

研究のまとめと今後の課題

本研究では、中学社会地理的分野「身近な地域」の学習において、生徒の学習活動を支援する教材を開発し、活用させ、その有効性について検証してきた。

教材の開発については、実践の結果にあげたとおり、さまざまな地域素材を生徒に提示できたこと、さらに「なぜ、ここなのか」というこれまでと違った視点から地域を見直すきっかけを与えたことが、生徒の興味・関心を高めた。したがって、地域に興味・関心を持つきっかけとなるマルチメディア教材ができたと考える。また、本マルチメディア教材の活用により、生徒の自主的な学習活動が促され、本単元の目標に迫ることができた。

今後の課題としては、生徒の実態に沿うように、さらにより教材にすることである。また、学習指導計画の見直しを行い、無理のない活動ができるように年間指導計画に位置づけることである。

< 参考・引用文献 >

- ・ 研究報告書 第203集【教育情報課】 群馬県総合教育センター(平成14年3月)
- ・ 『わたしたちの東村』 東村教育委員会(平成14年3月)
- ・ 『東村の文化財』 東村教育委員会(平成14年3月)